

被災地の犠牲者 遠隔で身元確認

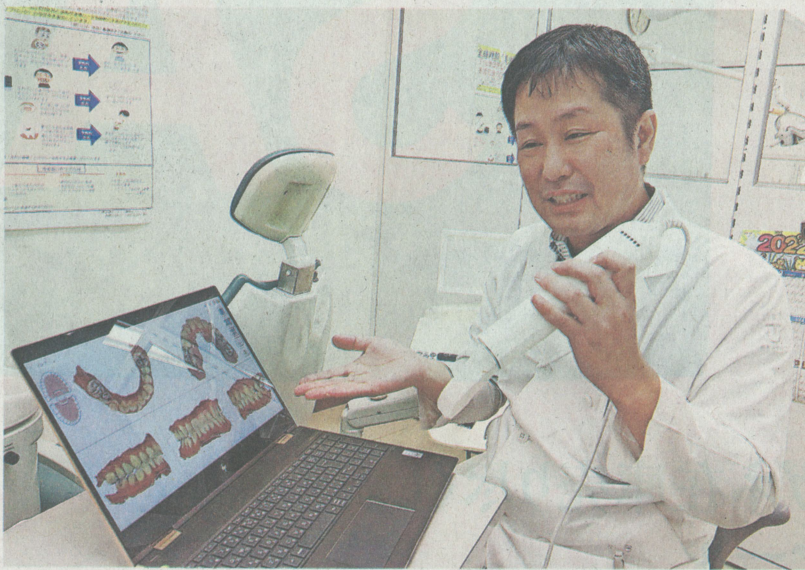
口腔内3D画像 5Gで送信

南海トラフ巨大地震に向けて、徳島大環境防災研究センターの高野栄之特任助教（災害歯科）が、被災地で採取した犠牲者の口腔内のデータを第5世代（5G）移动通信システムで送り、病院に保存してある電子データと照合して身元を確認する仕組みづくりを進めている。遠隔地からの迅速な身元確認を可能にする全国初の試み。10月に初めてのデータ送受信訓練を行い、将来の防災に備える。

高野徳大特任助教が着手

高野特任助教によると、現在の仕組みでは、被災地にあるカルテなどと照合する犠牲者の歯のデータを目的のため、身元確認までにかなりの時間を要している。新しい仕組みでは、災害発生後に現地に派遣される歯科医師が携帯型の3Dスキャナーを使って犠牲者の口腔内の3D画像を撮影し、5G対応の通信端末で病院などに送り、自動分析ソフトでデンタルチャートをつくる。これを基にカルテなどと照合する。

南海トラフ備え 来月訓練



専用のスキャナーを手に身元確認の遠隔支援について話す高野特任助教＝徳島市の徳島大学病院

口腔内の3D画像を撮影。5G対応の通信端末で病院などに送り、自動分析ソフトでデンタルチャートをつくる。これを基にカルテなどと照合する。

高野特任助教は2019年度から、県内の歯科医院に録した電子データが保存されている患者なら、ソフトを使うとさらに短時間で照合できる。この場合は開始から10分以内に身元確認ができるとみられ、大幅な時間短縮と負担軽減が見込まれている。

歯の状態をあらかじめ記録した電子データが保存されている患者なら、ソフトを使うとさらに短時間で照合できる。その後、国が全

高野特任助教はコロナ下で発生した20年7月の熊本県の豪雨災害で、ボランティアの被災地入りが制限されたのを受け、遠隔地から身元確認できる仕組みを目指すことにした。10月の訓練では、口腔内の撮影データをやりとりする手順などを確認する。高野特任助教は「一日でも早く遺族に遺体を返すことが復興につながる」と話している。

南海トラフ巨大地震で想定される県内死者数は最大3万1300人。11年の東日本大震災では、全国から延べ2500人以上の歯科医師が被災地を訪れ、約9千体の治療痕などを調べた。犠牲になった1万5900人の8%（約1200人）は歯科医による照合が決めた手となった。

（南志郎）